



## 感想

---

聖書の感想：神は現実を見ろと言っている

心の中に神の国はある

神の国にイエズスがおられる

イエズスは主と同様に探し求めるもの

弟子は師以上にはなれない。これはつまり等しくはなれる？

人にまかれた良い種は人によって育ちが違う

イエズスを見る人は主を見る。主は真理である。

これらから人は神を探し求め真理を見出し真理に仕える可能性を秘めているがどこまで成熟できるかは個人の問題

コメント 中を思量によって選びつつける選択が修行？

また、子供のようにであれば主に愛されるとある。

ということは早くに死んでしまった子供は主を見る。

また一度肉体関係を持てばその人と一生をともにしなければならない

他ともてば姦通である

あと思うに、もはや洗礼は必要ない。それは慣習と化している。

なぜなら心から主を信じて洗礼を受ける人は少ないからだ。

だから主という真理を心から願うとき、それは真理の徒である。

しかし真理を求めるのは難しい。真理は膜に覆われている。

求めれば与えられ、満たされれば失う。従ってたとえ真理を得たとしても

満たされればこれ以上の向上はなくなる。貧しさは幸いである。いずれ満たされるからつまり生きている間に真理を得ることはない。が真理を求めるロマンを生きている間に神から与えられている。人間の問題を人間自身で解決することに意義がある。

これが神の我々への愛。一生の向上。 また真理にはつらいこともある。

現実でも見たくない真実があるくらいだから。だから神にたどり着くまでに

生きている間、強く生きなければならない。避けざるべきことを避けずに生きること。

生きている間、真理にたどり着けなくても死んだらたどり着ける可能性がある。

その間に心の中にある小さな良心の萌芽をサタンに刈り取らせないこと。

コメント 中的なもの以外の超過と不足という二つのサタンを選ぶのをさけ、中的な、もっともうるわしき善いものを選ぶこと？ 一つしかないから求めるのは難しいのかな。

偶像崇拜は真理でない偽りの象徴。 神は真理。従って真。  
真を見て偽を見るな。真を信じるのは当然のことである。

コメント 偽りの真－真－偽りの真

ニーチェは真理を見て発狂。エドとアルは真理の扉を開いて力を得た。  
二人は辛くても真理を求めていた。  
現実世界でもし神とアクセスしたらイエズスの如き力を得るだろう。  
また、神の国が心にあるとしたら死んだ人間は心の世界に入る。  
つまりペルソナとして人間に憑依。サタンにとらわれた人間はサタンの使いとして  
人間の心に広がる。  
ソクラテスは真実を追い求めダイアニモンの力を得、真実のために死んだ。  
おそらくソクラテスも神の玉座に近いところに座っているかもしれない。  
そしてアトラスにソクラテスとか出してほしい

コメント 自分の中に幸福はある自足的持続的観照的な幸福  
死後の解釈については？

ペルソナとは心の精霊、心霊である。

また、主は完全性の象徴、完全な理想。真理、知恵、愛などすべての理想の中に  
主が存在している。  
主を崇めよとは今で言えば理想を追い求めろってことかもしれない。

だが理想を追い求めるにしても限界を知る必要がある。おごり高ぶれば  
主は下げるとはきっとそういうことだろう。へりくだれば主は高めるとあるが  
理想と現実を見て、現実が下にあることを知れということだろう。

主は理想の幸福を追い求めることだとしたら、これは卓越（アルテー）の話につながるやもね  
だがもはや幸福を追い求める生き方といより困難を回避する生き方が勝っているようにも思う。  
また幸福は活動→状態とすることで達せられる。  
よい思惑からよい行動をとれば徳というアルテーがもらえる。

全ては神がお作りになったとして、神が全てをご存じな理由は

神は全てのものを通して人を見ることができるから。

だから人は神から逃れることはできずに、神から目を背けてはいけない。

例え目の前のものが真理でなくても、現実というのは一つの真理であり

今ある現実を見るということは神の目線を気にかけているということ

現実的に生きる人間も神は数に数えている。

## コメント 知慮深き人

信仰をもつことが馬鹿らしいなんて思うかもしれないが、

命をかける対象を「昔の神」でなく、「今の真理」とした場合

彼らは世界の覇者となる可能性がある民族だ。

とすると世界の勢力均衡が変わる可能性がある。

だからサタンの勢力は彼らを相戦わせるように仕込んだのかもしれない。

今のつらい世界を肯定し、それを死によってでなく真実によって命をかけて

かえようとする本当のテロ集団ができる可能性があるというのに。

テロといっても殺すことは聖書によればしないだろう。悪には公正をもって

対処すべきとあるから。信仰も結局は対象によってよくも悪くもなる。

そして真実、真理、現在こそ信仰すべきなのはもっともなことだ。

聖書はそれを言っている。

うまいこと「主」という言葉の強調によってそれに気づかなかった。

だが巧妙な偽りによって感情によって中東では戦争。

封じ込めるための三枚舌外交を行った組織、それを黙認するような世界に対して

真実のダイスによって公正なる裁きを与えよ。

偽はやがて暴かれる。

偽りのもとに積み上げられた石（意志）はやがて崩れ去るだろう。

これこそが真実の黙示録。ホワイトライダーとはすなわちパラディン

現実と偽りに命をかけて戦う後世の人に賛美されるであろう実践者、探究者の戦士である。

中東の人達、十字軍で戦いに行った人達、神に命をかけることができる人たちは

神を絶対として戦いに行った。ではその神を真理や真実、現実にしりかえたら

現世のために死ぬる人が生まれる。信仰の力、信仰すること自体が前時代的

思われたりする人もいるかもしれないが、今生きるために現実のために

命をかけてもいい人があのような民族には誕生する可能性があるってことだ

特定の宗教信仰が偽りであったら、それを洗脳教育するのはいかんけど

現実の世界に命をかけれるくらい、

現実に対して強い信仰を持たせる教育はいかんのか？

現実とはもちろんあるがままの世界であり、それを信仰するという事は辛いことを認めて、それでもなお改善のために命をかける人間である。そんな人達がいたとして、彼らのジハードは偽りの預言者に対して行われるそんな強さを秘めた民族だから彼らは選ばれし民族と自身で思うのかもしれない。目覚めよハートランドの哲人たちよ。サタンに惑わされるな

中東は実際に命張ってるから命かけろの重みが違いすぎるし、さらには子供もそれを見て育つから死を実感しているという面で今の日本とレベルが違うな。彼らは復讐のためかわかんけど生きようともするし、医者になりたいなどと語るのももったいなことだ。そんな人々達にこそ鍛錬修練の場を与えて現在を巻き返す力を与えると世界に対して強い因果をもたらすかもしれない。日本は資源がない。ならば人を資源とするしかない。生きることを渴望する人に日本からの援助を与えるのも一昔は日本だから日本人に力貸せよとか思っていたが一信仰することを自らしない人間に、神が語りかけても聞かず、見ざる受けざるの描写が聖書でもあったようにしない人に何を与えても無駄だからユダヤから多民族へ神の加護が移ったとあるように生きることを臓腑のもとから欲さない人に機会を与えるよりも心から願う人間に与えたほうが全体として良いに決まっている。だったらそちらに援助するのも頷けることだ。一人の人間をよくする思惑よりも、組織を、それよりも世界をよくする方向に力を向けるなら国としては当然、生命力あるのを選ぶのが妥当としか思えない。この世界は生きている人々の世界だ。生きることから逃げられはしないのだ。だがどうしても死にたい人間もいる。これは自分にはわからない。死にたい人間のための社会ってなんだろう。

そして度を越した加護を与えすぎて、戦士たちが乞食となる可能性もあるその時、恩寵を得られなかった人々にまた加護を与える。彼らはすでにつらい時を過ごし、辛くても生きようと必死こいてるかもしれない。その場合、そこに加護を映す。常に腐っては捨て腐っては捨て、生えてきたら水をやり育てるを繰り返す。生きる力を重視した、加護。それは身体障害には左右されないだろう。精神の場合は前述の通りに、死を望む型があつて、それはどうなんだろう。生きることを願う人間が死にたがる人間に対して磨り潰すマシーンを与えるなんて考えられない。安楽死施設を用意するにしても、なんだろう。

ただ常に死しか考えられないことってあるんだろうか。  
長くその状態が続くが終わってしまう場合もあるだろうし、  
本当に死にたがっている人がわからない。  
常に生きる力があるなんて人はそういないだろうな。  
だけど窮鼠猫を噛むとあるように、ある時に無意識にも  
意識あっても生きることを選択するのは生きることを望んでいるのかもしれない

ところで俺は何者か何を語っているのか決定をくださるのは神であるぞ。  
しかしながら国はまるで神のように振る舞っている。  
神の力が付与するのは神を信じていることが前提だとしたら今の国に力はなく  
偽りの神に偽りをほざいても罰はあるまい。  
サタン同士の相克によって砕けるのもいいかもしれない。  
真理を信仰するという事について神を侮辱したことになるとも思えん。

ちなみに社会のことがよくわからないので虚言の可能性大です。

こんなことをここで言われたらバッシング受けるかもしれないけど  
信仰があっても信仰故に自ら死を選ぶ人もいるなあ。  
絶食してそのまま果てる。この場合、自殺者でなく聖人として崇められるけど  
死も「目的」で賛美されたり批判されたりするのか。  
正常な精神で実際の世界に成果を結べるかわからないのに  
進んでやすらかな死を願うってすごい。このような精神で死ねるなら  
この精神を目指す方法を探すのがいいのかもしれないなあ。  
そしてもしかしたらこの過程で死以外の選択肢も見つかるかもしれない

主は愛だの真理だの絶対だの宇宙を作ったのだの言われてるけど  
ただ究極や根源っぽいものを集めて、これが「主」です。と言ってるのかもしれない。  
ここで分析哲学？の知識と言語哲学？の知識を持っていたら人の指す「神」が  
どの範囲で含まれているかわかって面白いかもしれない。  
神は探すべきものだとして、強制でないなら、それは全人類の目標ではなく  
理想なのかもしれない。ということは理想のなかに神があると考えて  
だからこそ様々な神がいるように古代の人は思われた。  
農業の神やら戦いの神やら。我々には神が付いているという言葉は  
理想を目指したから相手の軍隊よりも神（理想）に近づいた。すなわち神もこっちのほうに  
近づいた。ならばこっちに気づくはずだ。だから我々は勝つはずだ一的な論理だろうか。  
全ての神を合成すると神になるのかもな。こうして多神教と一神教が合一し

また神であるから無限の力をもつ論理を発動させて、どの神も無限の力をもつと認めさせ、司どりが何かの違いを見せれば多神教と一神教も解決しやしないか。無限だから、誰かがこっちの神は無限の力を持たないと言ったとしてもそれはそこに無限の力を注がなかったからと言ってしまえば終わるまあ聖書とギリシャ神話くらいしか読んだことないから多神教について確かな知識を持っているわけでないけど。